
不死身男とヤンデレ少女

六畳六間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死身男とヤンデレ少女

【Nコード】

N8433R

【作者名】

六畳六間

【あらすじ】

ごく普通の高校生。

ごく普通の高校生活。

だけど不死身な主人公。

と・・・

終始内気な女子校生。

終始普通な高校生活。

だけどヤンデレな女の子が描く青春…なのかなあ

ストーカーは違法です。(前書き)

六畳六間です。

こういう小説は書くのが初めてですので色々ぎこちないですが楽しんでいただければ幸いです。
では本編をどうぞ。

ストーカーは違法です。

えーっと、名前は深山龍児ふかやまりゆうじ自称“俺”。高校一年、趣味は読書、寝ること、ゴロゴロすること。

あと：俺、“不死身”です。

さて自己紹介とカミングアウトが終わったところで俺の高校生活を始めるとするか。

中学の時、俺は何一つ変化のないありふれた日常をさまよっていた。起床、登校、下校、就寝：いつ誰が最初にやり始めたリズムなのかも分からない生活習慣。

ただある日、下校、就寝の間に“絶命”が割り込んだ。交通事故：平穏な日常を送り続けていた俺には最高で最悪のサプライズだった。意識不明で重体：お約束だが搬送後に死んだ。だが、死んでいなかった。不死身だったからな。だがその日から家族は俺を家から追い出した。無理もない、俺の心臓は止まったままなんだ。一度死んだあの時から：

「なーにぼんやりしてるんだ？」

後ろから聞き覚えのある声、振り向くと中学の時から一緒の櫃原賢かしはらけんいち一がいた。

「いや、昔のことをな：しかし、暑いな、もう夏かあ」

窓の外を見ると巨大な太陽、見せつけるの好きだねあんた。おかげでこっちは干物になりそうだぞ。

「夏はいいぞ、海然りキャンプ然り」

「どっちも太陽の下じゃねえかよ、せめて屋根を恵んでくれや」

俺は暑いのが嫌いだついでに言えば暑苦しい人間と分厚い教科書も

嫌いだな。高校の教科書は案外薄いから楽だ。ただ、数学とか科学にある“？”やら“A”これがけしからん訳だ。なんでかって？そりゃあ？とかBに続く臭いぶんぷんだからだよ。続けんでよろしいんだがな俺としては：

「ところで龍児、おりいって頼みがある。聞いてくれるか？」

「ん？ああ、内容にもよるがな：なんだ？いっとくが宿題とかだつたら無理だぞ」

こいつが頼み事とは珍しい。何だろうか：

「いや実はな：」

「は？ストーリー？」

「バカっ声がでかい！」

まさかそうくるとは、久しぶりに面白くなりそうな予感だな。

「んで？誰かは分らないのか？」

一応聞いてみる。

「それがわかれば困ったりしない！いや、困るには困るが：」

まあそうだろうな。しかしストーリーか：

「なあ、それって普通さ、男子が女子に対してやるのが一般的だよな？」「いや、俺に聞くな！犯人に言え！！んで頼みだが：」

「捕まえてくれてるか？」

「御名答」

やっぱりな：相談者が女子ならなあ：よりによってこいつかよ。

そう思いつつもやはり心配なのも事実、犯人がもし危ない奴：あ、待てよ：

「なあ、もし犯人が男だったらどうする？」

「アッ！」

「そのリアクションは何人の人間に通じるんだろうな：」

「いや現実になりかねんぞ龍児もし掘〇れたりしたら：俺は：アッ」

「いい加減止めてくれ、気持ち悪い！」

樫原の声は教室内に響いていた、しかも最後の方。これじゃあ俺が

疑われる、いろんな意味で。

「とにかく本題だ。えーっとお前はいつストーカーされてるんだ？」

「登下校とか休日の買い物とか」

登下校ならわかりやすいな…てか、よくやるよな、ストーカー。

「よし、じゃあ今日の帰りに俺がコッソリお前をつける。それでいいか？」

「それってストーカー…まさか龍児、犯人はおまー」

言い終わる前に俺の拳が入っていた。いや、わざとじゃない脊髄反射だ。

「なんで俺がお前をストーカーせねばならんのだ？」

「“なんで”のニュアンスが“揉んで”と同じだったぞ今！！」

「知るかぁ！！つべこべ言ってると助けてやらねえぞ？」

何が揉んでだ気色悪い。ほんと、趣味悪いいなコイツのストーカー・
・とは思いつつも、成績優秀でクラス委員のコイツは何かと人氣者だ。俺よりな：

「わかったわかった、じゃあ放課後に頼む」

「最初からそう言えよ…ったく」

そう言いつつも若干不安だった。机に突っ伏して考える。ストーカー
ーと言えども立派な犯罪者だ。わざわざそれを捕まえようとする俺
っていったい…まあ大丈夫か、不死身だしな！とことんこらしめて
やるぜフフフフ

「なんか怖い顔になってるよ深山君」

えっ！？——俺慌てては机から顔を上げる。

「あはっ驚いた！って顔になったよ」

目の前に立っていたのは同じクラスの夢里園生徒会役員（確か書記）
で成績もいい。そして可愛いのだ。

俺は夢里が近くにいると心臓が止まりそうなくらい…いや、既に止
まってるけど緊張する。まああれだ、好きなんだわな…ははは。と
はいえど今まで何度思いを伝え損ねたことか…そんなこんなで死ん
じまったよ俺は。

「ど、どうした夢里。お前から話しかけてくるなんて珍しいな」
ポーカーフェイスだ俺！悟られるな、今の緊張を。

「ふふふ、ポーカーフェイスかぁ…」

「は?! えっ?」

なんで? 読めるのもしかして?

「読めるよお深山君はさなんか分かりやすいんだよねえ」例えはいつも想っている人とか」

マジで? 気付いてたの? そんな…いや待てこれはチャンスだぞ。今こそ俺の気持ちを――

「夢里、そうなんだ…俺はお前のこ――」 「檀原君のことでしょ? 仲いいもんねえあはは」 「あ…うん、そうなんだ。俺とアイツ仲いいからさ…」

もう、いいです。このノリは。てか全然見えてない…まあいつか、取りあえず賢一の事を夢里にも相談してみるか。

「なあ夢里」

「なに?」

「ストーリーってどうすればいいの?」

我ながら語弊たっぷりの質問だった。犯行声明的な発言だったよ、はぁ…いや、夢里なら理解してくれるはずだ!

「うーん…その場合私も共犯者になるのかな…?」

「いや、質問を変えるから、えーっとストーリーの対処法についてご意見を頂けないでしょうか?」

慌てて訂正する俺。夢里の理解力を過信していたな…いや、理解してたら逆に怖いよな。うん。

「ああ対処法ね、びっくりしたよ。突然の犯行予告かと思った。」

「自分も言い終わってから気付きました。」

「深山君、憑かれてるの? ストーリーに」
憑かれてるって自縛霊かよ。夢里ってなんか表現とか言動が変わってるよな…まあそこがいいんだが。

「いや、あいにく俺はそこまで誰かに愛されていない。賢一がな、

その：憑かれてるんだストーカーに」

「憑かれてるなんて変わった言い方だね」 いやアンタだよ元ネタは！

「あ、いやそれはおいといて：なんか知らないか？」

「そういうのは現行犯で取り押さえちゃいましょう！ 一気に押し倒してしまおうのです。」

「張り倒すの間違いじゃないか？」

今日やっとな夢里に突っ込みました。

「あ：押し倒したら深山君がストーカーだねえ。ストーカーのストーカーってなんか複雑だねあ」

いや、そのポジションは狙ってないから。

「ありがとな夢里、参考にさせてもらうよ」

「うん。そういつてもらえると嬉しいよ」

夢里が言い終わると同時にチャイムが鳴る。授業は後少し、気合い入れていくか。

「あ、そうだ深山君。」

チャイムがなりざわつく教室内。夢里が俺を呼び止める。

「深山君のことが好きな人だってちゃんというんだよ例えば」
え？まさかこれってきたかんじか？ どう答える俺。ここは冷静に対処しよう。

「檀原君とか」

「あ、うん。そうなんだウレシイナー」

不死身とて痛いものは痛い。怖いものは怖い。（前書き）

あらすじ

賢一「あらすじか、ストーカーを捕まえるぞって感じか？」

夢里「わあすごい」

俺「真面目なあらすじは？」

賢一「それならほれ、俺の股間に…」

俺「ストーカーを捕まえるぞ！！！！」

では本編をどうぞ

不死身とて痛いものは痛い。怖いものは怖い。

放課後――

とりあえず色々とはしたが一応放課後になったな。あれから夢里との好感度upイベントはいつさい発生せず、俺はこの放課後に今日の青春全てを捧げる事にした。もちろんやけくそだ：そもそもストーカーってどうなのだろうか。ほっといてもいいんじゃないか？そんな身も蓋もないことを考えてしまう。

「待たせたなストーカー準二級」

うっとうしくなってきた。

「そんな資格は持ってないしとるつもりもない」

「そうか？もったいない：」

なにがだよ。なんで残念そうなんだよ！

「ふざけてないではやくしたくしろ。早いとこ片づけたいからな」

「いや、それがな：犯人のことで追加情報が」

「同じ高校生くらいの子らしいんだ」

「だから？」

「今学校を出たら部休で帰宅ラッシュだろ。」

なるほど見分けがつかなくなるわけだ。人気も多いしな。

「時間つぶすか？」

「そのつもりでな。ランプを借りてきた」

「小学生？」

「いや、大人のランプだ！」

ポーカーとか？あとなんかギャンブル系か？

「ダウトウツ！」

「ダウトやりたいのか？」

「うん。」

「しょうがない、どうせやることもないしな：」

そういつてエントリーする俺。だが間違いだった。

「ダウトウツ！」

「ハズレだ」

「ダウトウツ！！」

「ハズレ。」

「ダウトウツ！！！！」

「馬鹿なのか？」

「ダウトウツ！」　そういつて俺を指さす賢一、はっきり言つてウザイ。

「おい、ダウトの貴公子（仮）お前ダウトウツ！つて言いたいだけだろ？」

「ダウトウーレの騎行だって？」

「わざとらしすぎて突っ込めん。あと作曲者に謝れ」

「ふっ、ワグナーに謝るかどうかはどうかは別として、ダウトウツ！と言いたかっただけなのは紛れもない事実だ。」

「今ならはり倒せるよお前のこと。」

「それに性的な意図はあるのか？」

「ストーカーよりもお前の脳みそが心配だ」

まあこいつがダウトと言いつ出した時点で無視するべきだったのか。他にやることはないとはいえな。こいつのダウトウツ！をあと何回聞くことになるかと考えるとな…だるうっ！

結局その後約百回のダウトウツ！が観測された。

「やっと終わったか。」

俺はもう全てやりきった感じになっていた。もうストーカーとか出てほしくない。

「よし、じゃあ俺が先にでるから龍児は少し遅れてついてきてくれしっかりしてやがんなあこいつ。バカなのに。」

「へいへい、犯人はとっつかまえともいいんだな？」

「おい…食うなよ」

「食うか!!」

いちいち面倒くさい奴だよこいつは。

・・・そんなこんなで学校を出る俺。前方には賢一の様が見える。これでよしだな。

しかし、ストーカーなんているのか？本当に。それらしき影なんかは…ん？

俺を追い越す女子高生がいた。（制服は違うがまあ高校生で間違いないだろう。）ただそれだけの描写だ。ただ・・・なんかこう変なんだよな。感じ取るものが…こう禍々しい感じの…そう、ストーカー的になってストーカーだああ！

「マジかよ!」

無意識に呟く俺。そして直ぐに叫ぶ。狙いは賢一だろう。ならばとるべき手段は…

「賢一！犯人がそっちに向かってる。走れ!!」

そう叫んで女子高生を確認…っていない!?

「どこに行った?」

「う・し・ろ」女の子の声。

「ま・じ・で?」16歳男性の声。（俺）

振り向くとさっきの女子高生。でも禍々しさが増して…いやなんか病んでる。

格好もよく見ると怖い。髪の毛なげーなおい。顔が見えないおかげであの井戸から出てくるホラーな女の髪の毛サラサラバージョンミたいだ。――怖っ!

いやしかし、俺はこのストーカーもとい女子高生を捕まえないければならない。ここは男らしく堂々と。

「殺してやる」

ストーカーが呟く。

「へ?」

「お前、邪魔した。私とあの人の時間を壊した。だから殺す。」

「待つのだストーリーカー、どうゆうことだ？賢一とお前は付き合ったりしているのか？」

「そうよ、私達は結婚するって約束したの」
結婚するってマジで？アイツと？ストーリーカーが？

「いつそんな話を？まさか妄想とかでは？」

「馬鹿にしてるの？確かに約束したの現実で。忘れないわあれは“幼稚園の時”————」

「小学生かよっ！」

思わずツツコミを入れてしまった。チョップもしてしまった、どうしよう。

「った！なによさっきから！あんた何者よ！！！」

「いや、賢一からストーリーカーを捕まえてくれって」

「それなら気のせいよ、私基本的に一日中あの人を見てるけどそんな人見かけてないわ」

そういうのをストーリーカーって言うんだよ

「お前は常に巨大な鏡を持ち歩け」

「どういう意味？」

「ストーリーカーってな：お前なんだよ」

「えっ！？」

なんか逆に笑えてしまう、この状況だと。しばらくショックが続くかもな：なんか悪いことしたかな。いや、そもそもストーリーカーするほうが悪い。反省しろ！！

「そんな、信じてたのに。今までずっと嫌いっていわれたことないのに！」

まあコソコソ隠れてましたからねお宅。

「ストーリーカーだなんて……………」

思考が止まった。連行しますか。全く、殺すなんて言われるときはどうなるかと。死んでるけど：でも不死身でも痛いものは痛いんだよな。

そんなことを考えていたらストーリーカーがなんか喋り出した。

「そうか、そういうことか。」

「何がだ？」

「お前、羨ましいんだろ。私とあの人の関係が」
あっちゃー、出来上がってるよ！この人。

「勝手にifな物語を創るな！俺はノーマルだ」

「嘘だっ！！！！！！」

「ええええ！！」

「やっぱり邪魔者は殺す！」

途端に襲いかかるストーカー。髪の毛で顔見えないから表情で本気かどうか分からない。いや、手に包丁持ってる。ははは。

ザクッ（心の効果音）

「分かる？アナタの心臓の鼓動。包丁から伝わって…あれ？」

「ああ、止まってますよ」

「え？」

ストーカーが驚いて顔を上げる。髪がはだけて素顔がみえる。なんだ、優しそうな顔だな…

「抜いてくれるか？包丁。」

そう言っただけ俺はストーカーの手に触れ押し出す。足下には血が滴るが大した量でもない。俺、不死身だから。

「とりあえず、話を聞こう。」

「へ？あ…えーっと…」

そのまま気を失ってしまったストーカー。

「あ、おい！！起きろ」

返事がない。ただのストーカーのようだ。

「参ったな…仕方ないつれて帰るか。」

こうして俺は確実に病んでるストーカーを担いで家に帰ることになった。

いや、刺されるのは苦手ですよ？（前書き）

あらすじ

龍児「ストーリーカーを見つけた」

ストーリーカー（仮）「見つけられた…」

龍児「ストーリーカーに刺された」

ストーリーカー（仮）「邪魔者を刺した」

龍児「俺は不死身♪」

ストーリーカー（仮）「……………」バダリ

龍児「仕方ない家に連れて帰るか。という流れ」

では本編をどうぞ

いや、刺されるのは苦手ですよ？

俺は深山龍児：不死身だ。だがそれ以外は普通の人間、五感だってちゃんとある。当然ながら痛みも感じる。

「だから…」

自分の家の居間が血に染まっていくのを気にしながら話をきりだす。

「あの、包丁返して下さい。痛いんで…」

「ウルサイ：邪魔者は殺す。」

「だから誤解だって」

「じゃあなんで私をここに連れてきたの？お前も私を邪魔者とみたからでしょう？」

「お前と一緒にするな！」

あと俺はノーマルだ：と言おうとしたけど包丁が刺さったので言えなかった。にしてもこいつ、少しは感謝してくれよ。ここまで連れてきたやったのは俺だぞ？

「なあストーカー。」

「ストーカー？」

「いや、うーんと：ストーキングガル？」

ガルは本気で発音した。ストーカーは本気で刺してきた。

「じゃあ名前を教えろよ！！」

「華音：」

「かのん？」

「そうよ。私の名前。」

「じゃあかのん」

グサ：

また包丁。

「何するんだストーカー」

「下の名前を呼んでいいのは家族や親戚だけ」

だコイツは。

「なんだ、つけるくらいなら直接話しかけて見ろよ。」

「……しい」

「は？」

「はず…しい」

「はっきりと言えよ」

「恥ずかしいの…」

何ですとー！！今までストーカーしてたのに？マジでか？乙女かコイツは。

「あ…そうかそれなら仕方ないな。うん。」

「でもあれだ、話さないことにはなにも始まらない。少しずつ近づいていけばいいんだ。」

「近づいていつてるわよ…1日10？ずつぐらい」
短かっ！！！！

「そ、そうか…凄いことだなうん。」

「なんでさっきから上から目線なの？状況は変わってないはずだけど」

「まあ、あれだ俺はお前の敵じゃないむしろ見方と見るべきだ。」
刺されないためにはコイツに味方するしかない。まずは誤解を解かなくては

「ふーん…でもあなたからあの人の匂いがするんだけど」

「今は血生臭いですけどね…」

今、俺は一人暮らしの利点を見つけ出した。

『血まみれでも親にバレない』わーい、（ー！、）ノ正直必要とする人は少ないだろう。でも今の俺には最高だね。いや、刺されるのは苦手ですよ？

「それはお前の血でしょう？私に言われてもどうしようもないわ。止めたら？」

「バカにしてんのか？」

「殺そうとしてるのよ」

「だから不死身だって」

なんどいったらわかるんだ。まあ普通は無理だよな…てか初めてだな家族以外にこの事を教えたのは。なんでコイツ？嫌がらせ？どうせなら夢里に…ん？

「なあ夢里？」

「なに？」

「俺のクラスに夢里園って奴がいるんだが…もしかして」

「ああ園ね、いそこ…だったかな？」

「な、なんだってー」

そんな馬鹿な、夢里とこのヤンデレストーカー女がいところ同士だというのか？

「ふーん……」

愕然とする俺の顔を見て何かを考える華音。クラスの夢里とは一緒にしたくないから心のなかでは名前で誇称しよう。

「はいこれ…」

「え？」

華音が渡したのは包丁だった。血まみれの。

「お前は園のことが好きなようね…」

「はう！？」

見抜かれた？

「あ、本当だった」

「かまかけか！！」

「単純…」

ちっ…誰にも話してないってのに。

「まあいいわ、お前さっき私の味方と言ったでしょう？」

「お、おう…少なくとも敵ではない」

「ふふ、そう…」

笑った。逆に怖い。髪型変えろよ…ついさっき井戸から出てきてテレビすり抜けた人だな正に

「お前は私に協力してもらう。」

「はあ？」

「しなければすべて話す。夢里園のこと、不死身のこと」

「――――」

最悪だ。本来不死身は最強の力なんだがその情報を振りまかれたら俺は化け物扱い。学校には行くなくなる。夢里のことを言われたら、恥ずかしすぎて家からでれない。

「どうする？」

「条件がある。」

不利なのは俺、だが引き下がり続けるわけにはいかない。

「……いいわ、聞いてあげる。」

「お前にも協力してもらう！」

「はあ？なんでお前なんか」

「そうしなければ賢一に今日のことを全て話す」

「殺すよ？そんな事したら」

「俺は不死身だ」

俺は華音の顔みて笑う。

「……まあいいわ。お互いにね協力。悪くはない」

「そうと決まればお前は一刻も早く俺の家から姿を消してほしいんだが……」

「言われなくても……あ、無理ね……」

華音は顔とか服とか血だらけだった。まあある意味での『ぶっかけ状態』だが二度とごめんだね。

「シャワーはあるの？この家」

「まあボロいが風呂場ならあるにはあるそこの角曲がって……って入る気か！」

「悪い？協力するんでしょ？」

そういう問題なのか？なんかないのかこう、男子高校生の一人暮らしの家でシャワーを浴びる？なんてエロゲ？

「ああそれと……」

「着替えも貸してほしいとかいうきか？」

「気が利くわね…」 「あーもー!! 着替えも用意しておくし学生服も洗濯しといてやるよ!! ついでに晩飯も用意してやらあ!!……!!」
「よろしく」

「少しは遠慮しろー!!」

忙しい青春の幕開けだった。

続きます

いや、色々捨てすぎだから（前書き）

ストーカー騒ぎがあつて、いきなり刺されて、家連れてかえつて…
もうふろはいつて飯食つて寝たい。

龍児

では本編をどうぞ

b
y

いや、色々捨てすぎだから

毎度おなじみの深山龍児。不死身です。一人暮らしなんで料理も出来るんです。エッヘン!!…だからってさ)

俺はヤンデレストーカー女華音から解放されて台所に向かっていた。時刻は午後6時55分…まあどのご家庭でも夕食時か夕食後の団欒でしょうね。そんな時俺は一人血まみれの包丁を凶器ではなく調理器具として使うべく一生懸命洗っていた。

「つたく、買ったばかりだったのに…」

そう言いながら俺は包丁にジョイをぶっかける。血油とかいうからこれも油汚れに分類されるはずだ、多分。

「おー以外と落ちる!やるではないかジョイよお前は我が家の誉れだよ」

食器洗いう洗剤に敬意を込めつつ夕食はなににするべきか…なにせ俺以外の為に飯を作ることが今までなかったからな。華音に何か聞いておけばよかったかな…うーむ…

「しょうがない。聞いてみるか…」

つぶやいてから脱衣所に向かう。うーむしかしこれは犯罪になるのだろうか…まあ、直接のぞきに行くわけでもないし大丈夫だろう。多分。

「おーい夢里く聞こえるか」

それなりに声は張り上げたつもりだったが聞こえなかったみたいで返事はない。まあつまりは脱衣所までなら入っても大丈夫ということだろう。

「すまん。入るぞ」

そう言いながら中に入る。

「ぬおっ!!」

いきなり視界に入り込んだのは…誰だこいつ?華音はどうした華音は…

目の前にいたのはツインテールの美少女。多分男を名乗るものが見たら脳内の思考回路をツタツタにするであろう瞳が特徴的だ…なんで俺の家に？

「あの、どちら様？」

「……おちよくりですか？殺しますよ」

「殺すってお前、夢里華音…ぐはっ!!」

華音と口に出した瞬間歯ブラシが目刺さった。

「目があー目あがーああ」

もがき苦しむ俺をよそに今に向かう夢里華音（自称）いまだに信じられんな…

「夕食は？まだなの」

「妙に食べ盛りだなお前は…今作るところだ、なにが食いたい」

「ご飯と味噌汁とたくあんがいいわ」

「食べたい割には嗜好が地味だなおい」

まあ楽で助かる。いやそもそも贅沢させる義理はないが…

「味噌汁の具は豆腐でいいか？」

「任せる。」

仕方ない、作るか。米は朝のやつをレンジで温めるとして…漬け物、あったかな…冷蔵庫を漁る俺。だいぶ違和感はあるが気にしたら負けなんだろう。気にしない気にしない。

「……手伝えばいい？」

なに！？予想外だな。まあ手伝ってくれんならそうしてもらおう。これが間違いだった。この判断さえなければ…二時間は早く夕食にありつけたことだろう。

「なあ夢里」

「お願いだから言わないで」

「ああ、まあ教訓だな…賢一の前で料理はするな」

「心得る…」

華音が手を出した瞬間出来上がり寸前の味噌汁が…黒っぽい何かに

変化した。家庭科じゃないもはや化学だ：元素とか分子とか、そういうレベルから変化している。なんて力だ：これを食べれば、死ぬのかもしれない。この俺でも：

「仕方ない。新しく作るから夢里は待っててくれるか？」

「：拒否できないわね」

少しの間ふれていないが今の華音は井戸から出てくるような容姿ではなくてどこかの邸宅から出てくるお嬢様みたいな容姿だ。まあ単純に美少女な訳だが、そんな女の子に悲しい顔されたらなんかやかした空気になるだろ？もうへりくだるしかないんだよ：

「なあ夢里」

「まだ言うつもり？」

「いや、そうじゃなくてさ：その、どうしついつもそうしていないんだ？」

「何が？」

「格好のことだ。髪、つないでるほうがいいと思うぞ？」

「……………」

無言、何か気に障ることでもいったか？

そんな不安を抱き振り返る。

「あ、」

元に戻ってました。

「なんだよせっかく誉めてやったのに」

「……………」

「顔、紅いぞ？」

ザクザクザクザクザクザクザクザクザクザク

約30秒で俺の顔が真っ赤に染まりました。グスン：

「余計なことはいわなくてもいい。お前は早く夕食を作れ：わ、私はおなかが空いたぞ」

「へいへい」

顔をタオルで拭きながら台所へと戻る俺。痛みで発狂しそうそうなのは内緒だ。

「出来たぞ。さすがに米と味噌汁だけじゃまずいからな…ほれおまけだ。」

作ったのは肉じゃが。俺が初めて作った料理だったな…昔母さんと…いや、そんなことはいいか…

「さあ食えどんどん食え!!」

「お前はあれか?おすそ分けが大好きなたちか?」

「つく、もんく言ってるとおまけなしにすんぞ!」

「ひ、卑怯だぞ!肉じゃがに罪はないはずだ!」

「残念だったな…この肉じゃがは俺の人質よ、食いたくばおとなしくしろ!」

「うぬぬぬぬ…」

気付けば俺は華音と普通に話していた。華音は気付いているのだろうか。今、俺が賢一だったら…華音の願いは叶うのだろう。ただ、ストーカーやってくるくらいだからな…期待は出来んか。

「飯食ったら帰れ!!」

「こんな暗い夜に?」

「ん?…確かに普通の人間がこの暗さでお前を見たら昇天確定だな。」

「またお前はそんな事を…少しは…」

またうつむき出す華音。面倒くさいやつだ。まああんまりいうと俺の命に関わるしな…まあ不死身だけでも。

「あー分かった分かった。帰りたくねーんなら帰んなくても問題はない」

正直問題しか見つからないが…

「そうなのか?ならそうする…」

少しは疑ってくれよ!!なんでさっきはあんなに疑ってたのにさ…

「そ、そうかならお前は居間を使うといい。今テーブルとかすから。」

そう言ってからテーブルの上にある皿や茶碗を台所へ運搬する。小さなテーブル、どかすのにさほど時間はかからなかった。

「なあお前」

「なんだ？」

「お前、人を見かけだけで判断したりしていないか？」

「そんなことはないと思うが…」

そう言ってみたが言われてみればそうかもしれない。華音が普通の状態の時とヤンデレストーカー女状態の時とは何となく接し方を変えてしまう。中身は同じ…なはずだけど。

「そうか。ならお前は夢里園のなにが好きなんだ？」

「何でそういう話になる」

いき何なんだコイツは…

「いいから答えろ」

「ったく…えーっと、可愛いところとか。」

「外見か…」

「そういうことを言うな！中身だってちゃんと見てる。なんかおっとりしてるけど優しい奴だ！」

なんか自分で言ってるで恥ずかしい。

「そうか、今は聞いてみただけだから気にしなくてもいい」

「なんでお前の気まぐれで俺が羞恥プレイを受けなきゃならないんだよ！！」

「私はあの人のために恥も捨ててるけどね」

「そうかいそうかい」

ふと横を見ると大きめのバッグがあるのに気付いた。多分華音のだろう。

「そのバッグやけにでかいな。なに詰め込んでんだ？」

「デリカシーのかけらもないな…」

「躊躇も無しに人を殺す人間にいたわる心など持たん」

「…まあいいわ。みたければみれば？別に大した物が入ってないし」
「爆弾とか…」

「あり得ないから」

中を漁ると出てきたのは

「双眼鏡…」

「愛用してる。」

「カメラ…」

「望遠レンズもある」

「雨がっぱ…」

「天候には気を付けてる」

「カ○リーメイト…」

「長期間の追跡用」

「ペットボトル…水か？」

「同じく長期間の追跡用」

「ナイフ…説明はいいや」

全部ストーカー用じゃん!! なにに入れてんだよ。あれ? まだなんかは入ってる。

ペットボトル…空っぽだ…ゴミか?

「あーそれはようたし用。恥は捨てている。」

「……………」

「いや、それ以外にも捨てすぎだから」

そう言うってからペットボトル（空）はゴミ箱に捨てた。

いや、色々捨てすぎだから（後書き）

評価、感想、要望

よろしくお願いします。

今夏だけど？（前書き）

龍児「ふあゝ…Z Z Z」

華音「「「起きろ」」」

龍児「え？なに今の声！重なって聞こえたぞ」

華音「仕様よ」

龍児「人間に仕様もくそもあるか！！」

では本編をどうぞ

（・△・）っ

今夏だけど？

不死身男こと深山龍児です。不死身も朝は辛いんです。だから…

「朝の3時に起きて飯を作る男子高校生がどこにいる！！」

「目の前にいる」

「屁理屈をたれるな！」

「いちいちうるさいぞお前」

なんで俺がこんな事してるんだ？もうほんと眠い。まぶたが重たい…

「起きろ！！」

調理用の長い箸が俺のまぶたを貫通する。

「ギャー！！」

「火を使ってるんでしょ？寝てたら危ないわよ」

「だったら視力を奪うな！！」

「別にすぐ直るんでしょ？」

まあそうなんだけどさ…あれ？眼球がない、どこだ？

「夢里く俺の目玉どこかに転がってないか？」

「自分で探せ…あ、あった」

どうやら箸に刺さってるみたいだ。

「…目玉焼きが食べたい…」

「冗談になってないぞこの状況だと。早く返せ」

焼かれると新しいのができるまで半日かかる。

「はい…」

「うおい投げるな！」

なにも知らないやつがみたらどう思うだろう…人の眼球を箸でえぐって投げ捨てる光景…間違いなく恐怖だ。chaosだ。いや、むしろシュールすぎて笑えるのだろうか。

台所を転がる眼球は段差へさしかかる。あ、落ちた

『ジュ~~~~~』

「「あ、」」

目玉焼き…できたよ。ちくしょーめ!!

「もう、やる気失せた」

そう言って部屋に向かう。もう寝よう、そんなでもって眼球が再生されるまで待とう。学校はサボる、いや怪我だな…流石に眼球を焼いちやいましたゝH A H A H A H Aゝなんていえないが…まあ明日適当に言っておこう。

「ちょっ!! お前、朝食はどうなるのよ!!」

「ダイエツトだと思えば苦ではないだろう?」

「そういう問題ではない! このままではあの人を見張れないじゃないか!!」

「それなら安心しろ賢一の家は“真向かいだ”」

「え? ?」

「言ってなかったか? 賢一の家はこの家の向かいにあるんだよ!!」

「April fool?」

「今夏だけど」

混乱しているのか? まあ確かに、好きな奴の家の前だからな…でもこいつストーカーじゃなかったか? それに幼なじみだろ? 家の近くぐらいきたことあるだろう。てか覗いたりしてるだろうストーカーだし。

「なあ、そんなに珍しいもんでもないだろ。いっつも覗きこんだりしてるんだろ?」

「そ、そんな大胆なこと…恥ずかしくて…で、出来ない」

あゝ無駄に乙女なんだったなこの人。大胆とか恥ずかしくて出来なとかよく言うな…大胆の領域越えて犯罪だろ?

「ど、どうしよう…あー!!」

パニックってる。なんか、見てて恥ずかしい。ストーカーの癖にとかいったらどうなるんだろう…目玉焼き追加かな。

「うわーん!!」

ホラーな容姿で物凄いベタな泣き声上げながら布団に潜り込むスト

「カーもとい華音。まあまだ日も昇っていないし本来あるべき姿だな。俺も部屋に戻るとしよう。」

目覚ましが鳴り響き、俺は本日二度目の起床を迎える。二度寝だったから若干眠い。薄目を開けるとそこにはやつれた感じの美少女がいた。ノーマル華音だ。（ホラーな容姿がノーマルという可能性は否定できないが）

「ゆ、夢里……大丈夫か？」

$$\left[\begin{array}{c} \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \end{array} \right]$$

完全にダメだな……脳の半分は死んでるとみた。

「夢里、なんか要望あるか？」

「おなかすいた」

「飯が食いたいのか：よし、待ってろすぐ作るからな」

$$\begin{bmatrix} h \\ \vdots \end{bmatrix}$$

小さく頷く華音。こうしてみるとやっぱりストーカーには見えない夢里っていう家柄はみんなこうなんだろうか？ クラスメートの夢里も可愛いしな〜おっといかん、ついにやけてしまった。さっさと朝飯と弁当を作るとしよう。

その後何事もなく朝食はすみ、学校に向かう準備をすれば……あ、マズい！俺は大変な事を思い出した。いや、普通の人にとっては何とでもないんだが、あのヤンデレストーカー女には致死量の毒に等しい。

「夢里！」

「……ん？」

まだ思考回路が断絶してる。

「おいしっかりしろ!! 今から賢一がここに来る!!」

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

ダイレクトに入った。鬱になったりしないだろうな……

「ふかやまゝきたぞ」

あんのバカ、このタイミングかよ!!! くそ! どうする? よく考えた
ら今の状況ってやばくね?

「どうした?」

「賢一、今取り込み中だ! ちょっと待ってろ」

「思春期男子は大変だねー。あれか? 賢者のあれか?」

「違うわ!!!」

くそ! マズい。このままだと本当にまずい。何とかして華音を...
いや待て、むしろあったことを全部話してしまえばいいんじゃないか?
チラッと華音を見る。あゝお口にチャックのジェスチャーだ。そん
で破ったら: 殺す。いやああ! ! こっちもやばい。むしろこっち
のほうがやばい。

「開いてるなら入るぞ」

な! ? 開いてるなら? 開いてるのか? なんで? 締め忘れか? そんな
ミスで俺は終わるのか: Good-bye 俺の高校生活。きっと女
を連れ込んだふしだらな高校生として生きていくんだろうか。夢里
にも嫌われんだろうな...

「どうしたんだ龍児、様子が変だぞ?」

今にはいる賢一、これで終わるのか:

「お前、どうする! ! あの人来ちゃうぞ」

「あ? あー.....」

もう気力とかなかった。

「あれ? 龍児その女の子」

「あ: コイツはなー」

「もしかして華音か? いやゝ久しぶりだな」

へ? 俺は華音を見る。華音は速攻で結んでいた髪をといてホラーモ
ードだ。勿体無い:

「賢一、突っ込まないのか?」

「何が?」

「あ、いや何でもない」

気にしてないなら深入りはしない。なんか知らんが賢一がバカで良かった。

「再開を邪魔して悪いがこのままだと遅刻するぞ」

ただでさえマイペースな歩きだからなこいつは、少しばかり余裕を持たねば。それに：

視線を戻すと硬直状態でオーバヒートしてるヤンデレが一人。こいつのですためにも早く出なくてはならない。

「仕方ない。行くか：じゃあな華音また来いよな！！」

俺の家ですけど：まあいいや。

「あ、そうだ夢里おまえの分の弁当が台所にあるかもしれんぞ」
「そういう残して俺は家を出た。」

「しかしな：龍児が華音と知り合いだったとは。いつからだ？」

「昨日からだ」

「へえ：：そういえばストーカー見つかったか？叫んでたけど」

「あ：それがな：逃げられた」

さすがに言えない。言ったら死ぬし。

「そうだったか：まあ仕方ないか」

「案外俺がいなくてもいいみたいだな。」

ホッとしたような感じなんだろうかこれは。でも本当に言わなくてよかったのか：賢一ならわかってくれるんじゃないか：

「龍児、また頼まれてくれないか？」

「ストーカーか？」

「違う。華音の事だ」

いつもとは違い真剣な表情の賢一。こいつが真剣だと調子が狂うが、今は真面目に聞こう。

「彼女を助けてやってくれ」

「なに！？」

予想外だった。てっきりストーカーの正体がバレたのかと。

「驚かせてすまん。でも真面目な話だ」

賢一は何かを決心したように話し出す。夢里華音の過去を：

続
き
ま
す

いや、それはない!! (前書き)

作者「更新遅れてすみません m (」」 m」

龍児「おせえんだよこの変態」

作者「お前の設定かえるよ…」

龍児「あ…すいませんでした」

いや、それはない!!

不死身だから俺は死ねない。死ねないから俺は生きてはいけない。

某公立高校の二学年教室。

終始うつむく少女の姿がそこにはあった。誰も彼女に見向きもしない。するとすればそれば…

「ねえ、夢里さん」

三人組の女子生徒。みただけで作り笑いだとわかるくらいの黒い笑顔を見せながらうつむく少女に近付く。

「……………」

少女、夢里華音は何も言わない。ただ下を向くばかり。まるで何も見えていないかのような表情。

「チッ…」

三人組の先頭は舌打ちをする。だが別に何ともない素振り、そう“いつものこと”なのだ。華音に用などないあるのは華音の持っている“金”。単純にかつあげにしにきていたのだ。いや、彼女らにとっては定期的な集金に近い。

「いつもどうり勝手にとらせてもらうよ」

そう言うひとり華音の大きなバッグをあさる。中身に興味はない。金さえ手には入れればいいからだ。

「……………」

華音は黙ったまま。いつものことだから…もう慣れとかではなく日課に近い。

「ちよ、キモっ何か入ってるよー」

バッグを漁っていた生徒が頭巾で包まれた弁当箱を出す。

「あ…それ…」

思わず声が漏れてしまう。もちろんその動揺を女子生徒が見逃すはずはなかった。

「あんた何入れてんの？…何これ弁当箱？」

「夢里の癖に生意気じゃない？」

「中身しょぼ！金持ちのくせにせくない？」

弁当箱を振り回しながらあの手この手で攻め立てる。普段なら同じない華音…だがその弁当箱は龍児から受け取った物…動かずにはいられなかった。

「は・な・せ…」

仕込みナイフを取り出し突きつける。

「ひいっ！」

「うそでしょ」

突然の出来事に混乱する女子生徒。無理もない、普段何の抵抗もない少女がいきなりナイフをかざしてくるのだから。その光景は死を直接的に感じさせる物があった。故に尋常でない恐怖が女子生徒達を襲う、そして恐怖は叫び声となって体から溢れ出ていく。

悲鳴…

わずか数秒の奇声が教室や廊下を支配する。

悲鳴を聞いた生徒が群をなす。無数の視線が生徒で溢れた教室の中で生徒を探し始める。

「ちっ」

軽く舌打ちをしつつ華音は人ごみに消える。立ち尽くす女子生徒を生徒たちが見つけるが関心に値するものではないと判断し立ち去る。

「私がムキになるなんて…あの不死身男…」

早歩きで廊下を進みつつ弁当箱を見る。なんでムキになってしまったのか自分でもわからなかった。

「龍児がくれたからか？いや、それはない！！…まあ、いいか」
考えるのも面倒だった。そしてその日生徒が一人早退した。

「いじめ！？」

俺は思わず声に出してしまう。

「あんまりでかい声を出すな…」

「あ、いやすまん。いやおまえから言われるとムカつく。」

「まあいい、一応事実なのは間違いない。」

いじめか…まあそんなイメージがないとはいえないな…

「んで、俺にどうしろと？いつとくがいじめをどうこうするとかなら不可能だぞ」

悪いが俺はそこら変に転がっているギャルゲーの主人公ではない。こんな体だが中身はただの高校生、他校のいじめに干渉する力はない。

「分かってる…ただ、せめて学校の外でだけでも華音を守ってくれないか？」

「ん…まあそれなら。でもお前は どうする、幼なじみ何だろ？むしろお前が何とかしてやった方が…」

「すまん。俺には出来ないんだ。」

即答ってこいつ…なんか理由でもあんのか？まあ聞きたくはないけど。華音がらみのことは何かとややこしいことがわかったからな…そもそもあいつ、外に出たら最強最悪最大のストーカーだろ？守る意味ないような…まあ賢一は知らないしな。

「頼む！」

「あーわかったわかったできる限りのことはする！」

まったく、こいつが真剣だと調子が狂う。

「本当か？助かる！早速華音に連絡してお前の家に呼ぼう！」「ちよっと待て！！」「え？何が」「全部だ！今進めている作業を全力で中止しろ！！」「わかったわかった…そういうことだから華音龍児の家に集合な」

行動がはえーよ！

こうして二度目となるヤンデレストーカー少女の家庭訪問が決定した。

いや、それはない!! (後書き)

感想、評価まったり待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8433r/>

不死身男とヤンデレ少女

2011年10月7日16時07分発行